



南方寛一先生 : 人と学問(南方寛一教授追悼号)

上宮, 正一郎

(Citation)

国民経済雑誌, 154(6):107-129

(Issue Date)

1986-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00173625>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00173625>



南方寛一先生——人と学問

上 宮 正 一 郎

I

去る9月14日、敬虔なカトリック信者であられた故南方寛一教授の一年祭（追悼）ミサが夙川カトリック教会で行われ、ご遺族はじめ、先生と親交のあった方々、門下生等が集まり、在りし日の先生を偲び、ご冥福を祈った。先生がこの世を去られて一年。今でも先生がひょっこり、ひょうきんに「どうしたの」と笑いながら現われてこられるような気がする。何かにつけ先生の存在の大きかったことを痛感させられてきたこの一年を振り返って、私には様々の思い出と思いが相交錯するミサでした。祈りをささげられた皆さんにとっても、全く同じではなかったでしょうか。

昭和60年9月17日、南方寛一先生はわずか61歳でその生涯をとじられ、不帰の人となってしまわれた。細身の体ではあったが、「山歩き」（先生はいつもこう表現された）で鍛えられ、病気もほとんどされたことがなく、健康そのものに見えた先生が、肝臓検査のための入院の必要性を私にもらされたのは、4月後半であった。しかし先生は体調には自信をもっておられ、極めて楽観的に話されていた。事実、5月連休には（最後となってしまわれた）六甲山への半日の山歩きも楽しまれた。しかし入院後わずか4カ月の余命。その表面上のご様子からはとてもうかがわれなかったが、先生のお体はそれほどまでに病魔におかされていたのだった。青天の霹靂であり、現在の平均寿命からいっても、あまりに早すぎのご逝去である。学者としてますます円熟され、ご活躍になられるべき時である。私たちにとって、誠に痛恨の極みであり、その悲しみの程をどう表現したらよいのであろうか。

静かにこの世を去られた先生の最後の瞬間をご遺族とともに見とって一年。先生にはただただ公私にわたり御指導・御厚情をいただいていたばかりの私には、心の支えを失ってポツカリとあいたその空虚な穴はますます大きくなるばかりである。私のような乏しい能力や知識、そしてその貧しい人生経験をもってしては、先生の学問やお人柄について語ることは、所詮不可能なことである。筆をとろうとしても、何からそしてどのように書き記していけばいいのか、ただただ茫然自失の状態であり、先生との思い出、とりわけ最後の5カ月間のことが、走馬燈のようにかけめぐってしまうばかりである。このような私がその編集の意をとて十分に尽せるものとは思われない。しかし以下の拙文が、南方先生のご業績やお人柄について、いくらかなりともその一端にふれることができるならば幸いであると、あえて筆をとる次第である。

II

先生は大正12年(1923年)10月8日に和歌山市において、南方儀一・みさを夫妻の長男としてお生まれになり、姉妹3人の中で育たれた。先生が晩年にいたる十数年、この上なく山歩きを楽しまれ、また牧歌的な景色・雰囲気を好まれたのは、市内からややはずれ、静かな山々に囲まれた土地で育たれたことが影響していたのかもしれない。

先生は昭和16年(1941年)3月、和歌山県立和歌山商業学校をご卒業になり、すぐ和歌山高等商業学校に入られた。和歌山高商時代、「経済学に対する興味、更に情熱ともいうべきものを注いで下さったのは、講義及びゼミを通じての北野[熊喜男]先生であった」(南方ゼミ雑誌「南凌」創刊号、(1960年)による。以下大学卒業までのエピソードの引用は、同号、2号(1961年)、3号(1962年)による)。ゼミの基調は、高田保馬『第二経済学概論』による知識の修得であったが、先生は北野先生の指導で栗村雄吉『価格の一般理論』、『独占価格の理論』について報告をされたり、2年次(即ち1942年)にはJ. R. ヒックスの『価値と資本』をリプリント版で読まれたという。ヒックスの書物は1939年

の出版だから、このようなものを読む者、読ませる者、そして当時の高商の水準の高さの程が推し測られよう。いずれにせよ、他の書物とともに、先生は当初から近代経済学の最高水準のものを学ばれ、経済学への道を歩み始められたことになる。「初めはファンクション (function) の意味がわからず、「需要は価格の機能である??」と訳してまごついた」と先生は謙遜しながら、かつ当時の思い出にふけりつつ、笑顔で私たちによく話されていた。ゼミは大学進学希望者の集まる受験ゼミで水準が高く、やがて南方先生は大学進学をめざして猛烈に勉強された。「中山伊知郎先生の『純粹経済学』の利潤極大の証明が不充分だといって騒いだ」こともあった。こうして当初は東京商大をめざしていた先生も、「政治と経済」とか比較的政治経済学的なものよりも「純粹経済学的」な学風を好まれ、また北野先生の示唆もあって、神戸商業大学に志望を変更された。

先生は昭和18年10月、念願の神戸商業大学に入学され、その後改称された神戸経済大学を昭和22年9月にご卒業になられた。昭和18年12月から昭和20年10月までは兵役で休学されているので、実際には二年あまりしか在学されていなかったことになる。先生は大竹海兵団に入団され、やがて横須賀海軍通信学校に入られ、通信技術や暗号解きを学ばれた。そして終戦は宿毛でむかえられた、と聞いている。先生のメカ好きや、鉄道ダイヤ表の解説(?)はそこご性格もさることながら、この時期の訓練の名残りかもしれない。苦しかったカッター操舵の訓練については先生はよく話されもし、また書き記されもしている(神戸大学漕艇部部報『神漕』12号、1969年3月など)。しかし概して先生は戦争体験について、自ら口を開くことはほとんどなかった。そして先生は戦争を嫌い、努めてこの時期のことを忘れ去ろうとしておられるようであった。兵役時代の集まりには全く参加されない、ということも聞いたことがある。兵役中には父上をも亡くされている。学問的情熱に燃えていた先生にとってこの時期は、多くの人たち同様に、二度と味わいたくない不幸であったことだろう。

終戦になり、昭和20年10月復学された。先生が坂本彌三郎先生の指導を受け

られることは「入学前に決めてあった。」「ゼミの選択が私の生涯の方向を決定づけた。」先生は坂本先生について語る時にはこのことをいつも強調された。

先生がいつもなつかしく披露されていた入学時のエピソードがある。「入学試験の面接の時、試験官から「入学後何をやるつもりか」と聞かれて、「坂本先生のところでヒックスをやり度いと思います」と答えた。と、突然、室の一隅から大笑いの声が聞えた。大学教授何するものぞと平気で面接を受けていた自分であったが、これにはいささか驚かされた。自分の名前が出たので発揮した坂本先生の傍若無人ぶりであることはあとで知った。」

坂本先生は当時ヒックスを研究されており、ゼミは水谷一雄先生のゼミと共同で『価値と資本』をテキストとされていた。ゼミは両先生と研究科在籍の小山満男氏（現広島大学名誉教授）の「三人の間ではげしく議論される。……学生は読まされる訳でもなく、先生方の御説を拝聴するだけ……。学生のゼミか、先生方の研究会かわからない位」であった、という。先生は、和歌山から片道4.5ないし5時間という長時間をかけ、しかも電車ではいつも立ちん坊という状態ながら、ゼミにはほとんど欠かさず出席された。「研究が面白いからというのではない。乱れた世相の中でこれだけが純粹であり、又美しいもののように思えたし、両先生の人柄が……それぞれ異っているが深さと静けさをたたえておられ……それに接する者の心に安らぎを与えてくれる様に感じられたからである。」

書物の背が破れて一枚一枚に分解するまで精読され、自らの展開した理論ないし解釈を惜しげもなく開陳され、納得のいくまで激しく討論を続けられたという坂本先生の学問・教育に対する姿勢、そしてその中にあらわれたお人柄。先生はその中に師であるとともに、人生の父・兄を見られたようである。そして先生もまた研究者・教育者としてこれを継承され、私たちの指導に生かされたのである。

その先生のゼミでの成果は「理論経済学と統計学」という卒論に結実する。先生の言によると、抽象的理論の研究を続けているうちに、それと現実の経済

生活との結びつきに次第に疑問を抱かれるようになった、という。高商時代からすでに高等数学（微積分学）に興味をもち、またヒックス研究との関連でその数学的知識を獲得されていた事情も加わって、現実の経済生活に結びつくものとしての統計学に興味を移されていったのである。従って卒論では、ジェヴォンズ、マーシャル、J.M.ケインズ、R. フリッシュ等を勉強されての、いわば計量経済学の基礎づけをねらった理論経済学と統計学の関係を論じられた。先生がよく強調された、「より具体的、より実証的な、従って現実により忠実な、従ってより有用な分析用具」たるべき経済学の役割、という考えをすでにこの頃にものにされていたのであろう。

以上は神戸経済大学ご卒業までの先生のご経歴やご体験であり、主に先生ご自身の書き残されたものから、エピソードをまじえて紹介してきた。さて神戸経済大学をご卒業後、坂本先生のご推薦でそのまま母校の助手として残られ、研究者・教育者としての道を歩まれることとなった。昭和22年3月には、すでに奥様と学生結婚されており、学生時代と同様の通勤、そして何よりも敗戦後の貧しく重苦しい環境の中で、先生は真摯にかつ熱情的に研究活動に励まれた。そして昭和26年10月神戸大学経済学部助教授、そして坂本先生ご退官後の37年3月教授となられた。当初は教養部での経済学を講じられたこともあるが、一貫して経済学史講座の担当教官として研究活動・教育に尽瘁されてきたのである。ゼミナールで先生のご指導を受けた学生の総数は、学部、夜間学部、大学院を合わせて、約330名の多きに達し、それぞれ実業界および学界等で活躍されている。

先生は、また昭和41年4月から42年3月まで経済学部夜間学部主事を務められ、大学紛争後の45年4月から3年間は大学評議員として、学長・学部長らとともに事態の収拾・改善に尽力されるとともに、その後の発展に尽された。そして49年11月から51年11月までは経済学部長、大学院経済学研究科長、評議員として、大学、学部ならびに大学院の充実・発展に献身され、学内行政上も極めて大きな役割を果された。

また先生は、昭和44年4月神戸大学六甲台後援会の幹事に就任されて以来、理事、そして常務理事として、長年後援会の事業遂行・運営に大いに尽力されてきた。特に重要な財団資金の運用とその処理について、募金について、事業計画や予算案について、非常に細心に心を配られ、後援会の一層の発展に尽力されてこられた。これらによって六甲台教官の研究活動・研究水準の向上に果たされた役割は非常に大きい。（私には、入院中も病身にムチ打たれて、その職務を最後まで果されようとした先生のお姿が焼きついている。）

先生は経済学史学会においても、昭和33年6月から35年6月まで、また43年5月から46年10月まで関西部会幹事を務められた。また27年度から29年度、39年度から41年度までの間に経済学史学会が行った「経済学古典文献調査及び研究」の調査研究分担者として調査研究に尽力された。また経済学史学会年報の前身たる「関西部会通信」や年報の創刊（昭和38年）にあたっての編集作業、さらに長年にわたる年報の文献抄録欄の編集作業への尽力など、その研究面とともに、多くの貢献・足跡を学会活動においても残されている。

先生のご経歴としては、さらに二回にわたるご外遊についても言及せねばならない。昭和37年8月から38年9月まで、連合王国、西ドイツ、フランス、スイス、オーストリア等に出張された。当時はスエズ経由の航海であり、主としてケンブリッジに滞在され、マーシャルとともに古典派の研究に努められた。二度目は47年7月から9月まで、同じくケンブリッジに滞在され、マーシャル関係資料の収集にあたられた。先生は60年度同じく連合王国に三度目の外遊の予定であられたが、病気のため断念されていた。

なお、クラブ活動関係においても、坂本先生、そして藤井茂先生のあとをうけて、昭和33年4月以来、副部長および部長として、神戸大学においても最も古くかつ輝かしい伝統をもつ漕艇部の一層の充実・発展に尽くされてきたことも付け加え記しておかねばならない。

さて、以上のようなご略歴は、神戸大学に残られて以来、一貫して、先生が研究・教育に専念・尽力されてきた「神戸大学人」であったことを物語っている。

る。その先生がご退官まであと一年半あまりにして、あまりにも早く突如としてこの世を去られた。ご逝去に際して、先生は従三位に叙せられ、また勲二等瑞宝章を授けられた。しかし、先生は今や天上の人である。

III

「先生の経済学史は、主として（政治経済学に対する意味での）純粹経済学の側面をとり上げており、「経済分析の歴史」といえよう。もちろん経済外的諸研究や、社会思想特に経済思想との相互関係を無視するものではないけれども、各経済学説を孤立してとり上げ、その論理的構造を、微細点の集積と論理的接合とによって再構成し、更に各学説の体系の因果的な連鎖の関係を追求される。史観なるものが予め与えられていて、それを基準として個々の学説を超越的に解釈し批判するのではなくて、先生はあくまで事実としての諸学説の内在的な解釈と批判を基礎として諸学説の連鎖——それには各学者のメンタル・ヒストリーを含む——を、更には長い歴史の本流を見極め、ふり返って各人を歴史的に位置付けするとともに、その貢献と及ばざるところ又は誤りを歴史的に評定するという方法をとっておられる。

先生にあっては、今日の経済学は、もちろん完成されたものではなく、順調な発展過程をたどって、急速に成ったものでもないが、経済学の歴史は、時間の経過の中の経済事実及び諸文化活動の進展に伴う、経済学の単なる進行ではなくて、明らかに論理的に精密化し、現実の経済事実の説明要具及至現実に加えるべき方策の基礎としての理論の有用化の過程をたどりつつあるという意味で発達である。先生は論理的精密性を強調されるが、このことは、人に、形式的な——或いは数学的なといってよいかも知れない——精密化乃至単純化が進歩であるかの如き印象を与える。しかし先生のいわれる精密化は経済学を、より具体的、より実証的な——従って現実により忠実な、従ってより有用な——分析要具たらしめるということである。（この意味で、先生は計量経済学に十分の希望と信頼を寄せておられるし、数理経済学——むしろ数学的方法——の

不十分さを熟知しておられる。)」

以上は恩師坂本先生が退官された時に、南方先生が「人と学問」として師の経済学史研究の立場・姿勢に関して書かれたものである。この文章の存在を知らなかった人は、「先生」をそのまま南方先生ととられたことであろう。ここに長々と引用した理由も、まさにここに先生ご自身の筆になる師の学風をそのままに継承し、さらに一層具体的に展開されたのが、先生のご業績の一般的概観及び評価としてふさわしく思われるからである。その広範な研究領域、そして各領域および各学者についての精緻な分析とその論理的再構成による研究成果・学識によって、学界でその名を知らぬ者なしの坂本先生ではあったが、論文の形で世に発表されたものは、スミスとマルサス関係のごく少数にすぎなかった。そして生涯の後半は経済学史よりも現代経済学、経済原論にその関心を移された。南方先生は、その師の指導の下でその経済学史研究の学風を継承され（私の知る限り、弟弟子たる南山大学森茂也教授もそのおひとりである）、古典派から新古典派に至るイギリス経済学史——これはそのまま経済学史そのものといってもよい——についての一連の労作を発表されつづけるとともに、講義や研究指導においても自ら実践的にそれを示されつづけたのである。

先生ご自身は経済学部学生向けの『経済学研究のために』で、読者を意識された、やさしい文章で、経済学史研究の意義とその範囲を解説されている。

「経済学は経済の従う傾向法則の定立を任とするものであり、単なる知識の集積や希望的観測や特定の利害の弁護論などではない。」「経済学史と経済思想史を明確に区別しうるものではないが、前者は主として経済学という論理的に体系化された知識の歴史を中心に見てゆくという点では後者と区別されるであろう。」「現在までの経済学の展開過程をたどることによって、現在の経済学の反省すべき点、進むべき方向を示唆することが、経済学史の任務である。」

これに応じて、経済学史の対象範囲としては、スミスの『国富論』で集大成・体系化されることになる重商主義と重農主義の諸学説を前史として、本格的にはスミスをもって始まり、現代の学説にまで及ぶ。講義では、重商主義、

重農主義を導入部分として、スミス、リカードゥ、マルサスに主要な焦点が当てられ、その後はマルクス、「限界革命」、そしてマーシャルにまで及ばれるのが、通常のパターンであった。

一口に経済学史研究といっても、その基本的立場やアプローチの仕方、対象領域、取扱う分野等によってその内容は全くさまざまである。英語では経済学史を一般的・総括的に History of Economic Thought, History of Political Economy と表現することが多い。しかし先生はそれよりも狭義の, History of Economic Doctrines を採用されることが多かった。その理由は上記の視点にもとづくものである。それは経済学史研究における「絶対主義」(absolutism, incrementalism) 的といわれる立場に近いものであったとみられるかもしれない。後に述べるように、私にとって先生のご研究の基点には一貫してマーシャルがあったように思われる。しかしそのマーシャル自身においてもそうであったように、現在の経済学の状態はまだ完成されたものにはなっていない。一応表面的・形式的にはますます精密化を増しているかに見える経済学ではあるが、それは分析技術上においてはそうであるとしても、実質的にはどうであろうか。

「現実の経済事実の説明要具乃至現実に加えらるべき方策の基礎としての理論の有用化」の要請は、現在の経済学によっても充されてはいない。それどころかその本来の任務、理想とは著しくかけ離れつつあるといってよい。先生にとってそれは経済主体たる「人間とは何であるか」の問いかけの欠如、あるいはその不十分さにその原因がある。現代の「経済時代」においては、人間生活に占める経済活動の比重は大きく、そしてますますその度を加えている。そして物財の追求は、人間性の喪失を各所に生み出している。物財はあくまで人間生活の目的に対する手段であり、目的化されるべきものではないのである。現代ではその上、「手段としての物財を目的として追求するという誤りよりも、手段たる物が、目的であるべき筈の人間を手段としてしまっているという恐ろしい事実が多いように見られる」と嘆かれた。現在の経済学は、この時代を反映すると共に、またそれに影響を与えるという相互規定の関係によって、「物量

的技術的な経済発展のみを求める経済学の体系」（先生はよく「物量経済学」とよばれた）の性格を強めてきた。こうした視座・反省に立てば、「絶対主義」的立場のように、現在の経済学が経済学者の取組んできた知的営みの最高水準というように見ることはできない。

「経済・経済学を論ずるにあたって、常に人間とは何であるかの問いを忘れてはならない。」これが先生が常に私たちに諫められ強調されたことである。経済学史上すぐれた学者・著書ほど人間についての深い省察と洞察とが背後に秘められている。私たちはこれを読みとらねばならない。この点で先生にとって、経済学史上最も偉大な学者はマーシャルであったと言えよう（そしてリカードゥと比較してのマルサスの理論の利点も、マーシャルとは水準は異なるとはいえ、経済現象の全体を、需給原理によって統一的に把握しようとしたほぼ同一の視座にあった）。「経済活動は確かに物的・技術的な諸条件にしばられているけれども、人間の自由意思の作用の可能性を否定するものではないのであり、そこに多元的な作用要因があり、これらを統一するための分析的要具としての需給原理なのである。」マーシャルの「自然は飛躍せず」のモットーに代表される経済観、経済分析上の立場、そして経済学史観、これらはいずれも先生の是とされ評価されたところであるが、中でもその「あるがままの人間」の分析を通しての「人間とは何か」の問いかけ、深い洞察と省察こそが最も高く評価されたところであったように思われる。「限界効用比がいわゆる限界代替率という論理的に実証しうる形で表現されうる概念を用いて、需給均衡の体系が建設された。主体的な行動の原理を基礎とするが、客観的に把ええない効用といった概念を用いることがないという意味で、論理実証主義的な立場からは進歩とみなされているが、他方この理論的展開を見て経済学は価値論を失ったと見る見方もあり立ちうる。主観的であれ価値説が経済学の基本的な視点を設定するという意味に於いて、単なる事象の記述のみではなくて、主体の動機にまで遡って目的論的に、その論理を追及してゆこうとする態度は失なわれたと見ることができよう。かくして事実を客観的に見ることは、個々人が主体的動

機に促されて行動していることを否定するものではなく、それぞれが「価値」
「すべての人々が、政治・経済・社会・倫理等すべての面における判断や行動
を律する総合的な基準、行動原理」の体系をもちそれに律せられて行動して
いるのであって、その「価値」の何たるかを理解せずして、社会現象を把握す
ることはできない。」この意味で先生にとってマーシャルは、研究上の一応の
基点であった。もちろんマーシャルをもってそれで良しとするのではない。現
在では旧くなったり不十分なところは彼以降の発展によって補い、あるいは現
代理論において不十分と思われるところにマーシャルを補わねばならない。

しかし以上の点を強調しすぎることはあるいは誤解を招くかもしれない。先
生の研究業績の特徴・貢献は、むしろ、古典派から新古典派、さらには現代の
学説に至る経済学の展開過程の広範囲にわたっての、原典考証にもとづく個々
の学説の緻密な内在的解釈、近代経済学的手法、とりわけ数学的手法による厳
密な論理の追求、これらの分析に基づく経済学の進歩・発展の歴史的な連鎖の
関係についての鋭い分析と総合的・大局的な判断にあり、これらこそが、世界
的にみても高水準にある我が国の経済学史研究の中でも、ひときわ異彩を放つ
と同時にその成果の独創性の高さの故に、学界でも広く認められてきた所以で
ある。これらの成果はもちろん坂本先生の下で培かれたものの結実であり、
同時に先生ご自身のそのより一層の発展への研究努力の賜物であることはい
うまでもない。上に述べたことは、もちろん個々の学説の忠実かつ厳密な解釈・
分析の積上げを基礎とし、それら諸学説の比較検討を通してはじめて浮び上
ってくるものであり、結果であった。先生ご自身、何らかの評価基準あるいは
史観を予めもって、それによって個々の学説を解釈するということは強く諫め
られたことである。

以上に関して若干付け加えて記しておかねばならない。先生の論文にはほと
んど他の研究文献への参照およびその引用が見られないことが、一見したとこ
ろの大きな特徴であった。先生にとって、文献を利用するということと文献に
頼るということは、全く別のことであった。原書に関しては徹底的に文献考証

をされ、それを特に引用したり明示されなかった場合もあるとはいえ、それは諸々の論文においてもはっきりその特徴をなしている。師と同じく先生のリカードの原書は表紙がはがれ、一枚一枚ばらばらであり、随所に書き込みがなされていた。と同時に、先生は第二次文献についても熱心に渉猟され精読された。しかしそれらはあくまで参考として摂取されねばならぬものにすぎない。学問は正確・厳密でなければならない。評価すべきところは評価し、批判すべきところは批判する。自らの誤りを悟れば改めねばならない。こうした真摯な努力・摂取のうえで、テーマに関して自らの分析・解釈を開陳するものが研究論文に値するのである。「誰がどう言っているかは二の問題だ。著者がどう言っているのか、忠実かつ正確にとらえまた論理的に追求することこそが問題であり、発表すべきことだ。」研究指導において幾度となく叱責されたところである。従って先生の論文は常に推敲を重ねられた自らの研究成果の開陳に終始し、第二次文献をも摂取・昇華された高い水準のもののばかりであった。と同時にその要求されるものがあまりにも厳格であったばかりに、その研究が具体化され完成されることは比較的少なかったように思える。少くとも書き流すということは非常に嫌われ、また教科書的なものの執筆や翻訳的な仕事には決して意欲をみせられなかった。こうしたことは先生の講義にも一貫し、学生にとっては非常に厳格かつむずかしいものに映ったに違いない。

先生は経済学を学ばれたはじめた当初から、当時の理論の最新・最高水準の近代経済学を学ばれた。それは経済学において数学的分析が本格的に駆使されはじめた頃だといってもよい。そして何より先生は数学に興味をもち訓練を受けていた。こうしたことが、先生の研究の数学的分析手法の利用という大きな特徴を結果する因となったことは確かだろう。しかしこれは論理の正確・厳密な追求という先生の研究態度によるところがもっと大きいといってよいのではないだろうか。同じく近代経済学成果による図表を用いての解釈・説明に関して、「のちに考案された手法をもって先人を解釈するに際して、後の理論の内容を先人に読み込むおそれがある」と注意されたことがある。数学はあくまで

論理の追求に利用されるべきものであり、それを説明する手段である。先生にとってこの意味で数学的手法による説明の方が図表的説明よりもベターであった。しかし数学的方法の役割、限界を何よりも認識されていた先生は、従ってまるで経済あるいは経済活動の意味を忘れたかのように数式の展開に終始する経済分析および経済学の最近の傾向を決して良しとはされていなかった。「人間の学」としての経済学の「物量経済学」化を嘆かれた。

IV

先生のご業績は広範・多岐にわたり、それらをすべてたどり、紹介することはとても不可能である。そこで以下では、価値決定論を中心に、価値論史についての先生の研究の一端をのぞいてみたい。

価値論は単に価格の基本的説明原理にとどまらず、経済学の基本的な視点を設定するものでもある。この意味で、価値論はその経済学の体系とその性格とを端的に表現することになり、従ってその分析・解釈は経済学史研究において最重要のこととなる。先生の研究の中心は当然この価値論の研究、それも価値の発生条件、価値の原因、価値の決定、価値の変動、価値の尺度等の全面にわたっての、古典派から新古典派までの諸学説の詳細な検討に向けられた。以下は私なりにその一端を要約したものにする。

スミスについて、彼は基本的には投下労働説の立場をとり、リカードゥ以下に継承されていったとする解釈がある。この解釈は誤っており、労働の価値＝犠牲の不変性の指定によって支配労働量を価値の尺度としたにすぎない。価格の構成部分としては賃金、利潤、地代——生産費目であり分配範疇——があげられ、自然価格・市場価格ともこれら三部分から構成される。自然価格は上の尺度で測定した価値の表現であるが、各費目の自然率における生産費によって決定される。しかしこれら費目の自然率の決定の論理がなければ、生産費説はそれ自体完結することにはならない。ここに需給説が導入される。

市場価格は需給比率説によって説明される。有効需要 D_E (自然価格を支払う意思及び購買力を伴った需要量) と供給量 S (市場に搬入された財の量), 自然価格 p_n , 市場価格 p_m との間には次の関係がある。

$$\frac{D_E}{S} \geq 1 \text{ に応じて } \frac{p_m}{p_n} \geq 1$$

p_m/p_n の比率が 1 より大か小を指示するのみならず, p_m が p_n を上回る (下回る) 程度も説明されている。しかしその説明は比率説の理論構造の枠のそとにある。この需給比率説は, それでも価格の自動的調節作用の説明には十分であった。資本・労働の移動の自由や土地の用途転換の自由が確保されれば, 競争によってこれらの報酬の自然率, そして自然率での生産費たる自然価格が成立せしめられることになる。こうして成立する自然価格は, 生産者・消費者双方にとって満足すべき価格であるという意味で, 社会的に最も望ましい価格である。そして完全に自由な競争がある限り, 自利心によって導びかれた各個人の行動によってこの価格が成立せしめられるのであるから, 経済的自由主義が望ましいという根拠がここに証明される。

しかし自然価格論は, 需要のみならず生産側の技術的諸条件や賃金・地代・利潤の自然率を一定と前提した静態論的な理論構造にとどまっている。これらの自然率や需要の変化がいかんして決定されるか。価格論に続く四章は, 一面分配論を扱い, またそれは本質的に動態的な内容であるが, これはスミスにとって, 上記のような価値論を補完し完成させる役割をもっていたとみられる。これが (超) 長期的需給説とも称すべきものである。それは結局, 上記の諸変化による自然率の変化 (その生産に用いられる数量の変化) をもたらし, 自然価格の変動をもたらし。これら諸原因の作用も, 結局は需要と供給の二つの総合概念によって規定される。

総括すれば, スミスにおいては, 需要・供給とも変化しえない場合の価格及びその変動過程は比率説——市場価格——によって, 需要を一定とし, それに供給が適合した場合の価格は生産費説——自然価格——によって, 分配論における価格は, 需要・供給ともに変化する場合の価格変動とともに, 需給説によ

って説明されているということになる。

リカードッにおいては、価値の絶対条件は効用であるが、価値の原因は稀少性（需要に比しての存在量の不足）と労働量（獲得の難易）に求められる。そして任意可増財について、しかもその競争価格についてのみ、投下労働説を展開した。（任意不可増財や独占財の価格、任意可増財の市場価格は需給比率説的に説明される。）彼が主として問題とするのは、相対的必要労働量が相対価値を規定するという点であり、しかもその変化に重点をおいている。しかしその変化の原因の探究には、絶対価値の変化を問題としなければならず、更に絶対価値の決定やその尺度まで論ずるに至っている。ところが彼は、何故価値の源泉を投下労働量であるとするかを証明してはおらず、単に措定したにすぎない。

彼の投下労働説の基本的構想は、財の相対価値は投下労働量に比例するという意味であり、次式で表わされる（ R_{ij} は j 財で表わされた i 財の相対価格、 w は賃金率、 r は利潤率、 l は投下労働量）。

$$R_{ij} = \frac{wl_i(1+r)}{wl_j(1+r)} = \frac{l_i}{l_j}$$

相対価値の変動の原因は、投下労働量の増減であり、賃金率、従って利潤率——それぞれ均等化傾向を示す——の変動ではない。

しかし彼は、生産に伴う時間要素、即ち各財の生産において、固定資本と流動資本の割合、固定資本の耐久性、流動資本の投下期間に相違がある事実と、賃金率・利潤率均等化傾向とによって、その論理を貫徹させることはできず、その修正をもちだす。これら三要因による修正論の説明は、『原理』の初版と第三版とでは異なっているが、これらは結局のところ、資本の投下される平均生産期間、あるいは資本構成の相違に集約される。これによって、相対価値は（ t は一財の生産期間、 t' は流動資本に対する総資本の比率、 W, P は生産費を構成する賃金と利潤）

$$R_{ij} = \frac{W_i + P_i}{W_j + P_j} = \frac{wl_i(1+r)^{t_i}}{wl_j(1+r)^{t_j}} \quad \text{又は} = \frac{wl_i(1+t'_i/r)}{wl_j(1+t'_j/r)}$$

によって決定される。右二項は、生産構造観として単線進行型（ボエーム・バ

ヴェルク的), 復線回帰型 (マルクスの) のいずれをとるかに依存している。いずれにしても, 彼においては, 生産期間の差に応じた利潤が相対価値の決定及び水準の変化の決定に参加することとなり, 価値は賃金と利潤を費目とする生産費説的に説明されざるを得ない (地代は差額地代説によって費目には入らず, 賃金と利潤には相反関係がある)。しかし彼は, これら要因による価値修正は軽微なものに見なして, 実際的には修正重視を否認し, 分配論ではこの修正を無視した展開がなされている。

リカードは労働をもって価値尺度とするのではなく, 一定量の標準労働の生産物をもって尺度とするが, それについては各版その他において異った見解を展開している。これは価値決定説の説明の仕方の相違と相関連している。第三版では, すべての財の平均生産期間の平均 t_m をもった財=金を尺度として選ぶ。とすれば, 生産物価格総額は投下労働量によってのみ変化し, 個別の財について投下労働説は妥当せずとも, 全生産物についてみる時には妥当することになり, 分配されるべきものは不変に止まり, 従って賃金と利潤の相反関係が見出される。彼が課題とよぶ分配論においてリカードが必要としたのは, 相対価値の水準の変化であり, 食料価格の騰貴が利潤率に及ぼす効果の変化の理論であって, その意味で彼の価値論は, 分配論の根拠付けとして展開されたものと解釈されるであろう。

市場価格が収斂する自然価格の成立においては, 賃金率・利潤率が均等化しており, 価格はこれらによって生産費説的に説明される。その成立は, 例えば穀物供給の限界地の決定一つを見ても明白な通り, 市場の働き=需要と供給によるのであり, リカードの説明はその需給一致の均衡点, そしてその変化を供給側の事情によって説明したものとできる。セー法則を前提として自然的・技術的条件 (人口法則と収穫逦減法則) の下で, 経済あるいは資本蓄積が自己展開する過程を, それを規定する分配面から解明しようとしたのが, リカードの経済学体系であるといつてよいだろう。

彼の論敵, マルサスは, 需給法則をもって, 一国の年々の生産活動水準のみ

ならず、財の自然価格、市場価格、独占価格、そして分配までもを説明する基本原理とした。価値論において、彼は初期には限界購買者説とよばれるものを展開したが、それは基本的には『原理』における（限界）需要強度説と同じ結構をもつ。

一財の（交換）価値＝他財購買力の原因はマルサスにおいては社会的評価であり、とりわけその財に対する人々の欲求の強さが強調される。供給は売られるべき財の量であり、需要は購買の手段と結びついた購買の意思（数量に応じて社会が支払ってもよいと認める犠牲、即ち貨幣量で表現される需要強度）である。需要量の関数としての需要価格－需要関数、 $p=f(D)$ が与えられ、現実の供給 S が与えられることによって、それに応じた潜在的な需要強度が顕在化し、 $D=S$ に対応するその需要強度が価格として表現される。

このような需給原理が価格決定の一般原理である。賃金や利潤、地代も同一原理で説明され、これら生産費目は当然価格の決定にも参加する。競争財の自然価格は長期的・平均的な需要と供給によって決定されるが、これは結局生産費と一致することは認められる。しかし生産費は供給を規定する要因にすぎず、それは市場価格と生産費 c との差が供給量を変化させることを通して、一致することになるのである。こうして、需給原理は均衡、均衡化の過程及び均衡の変化の統一的説明原理であり、次式で表わされる。

$$p=f(D) \quad D=S$$

$$\dot{S}=F(p-c) \quad p-c \geq 0 \text{ に応じて } \dot{S} \geq 0$$

このリカードゥとの価値決定論における相違は、当然価値尺度論にも表われるが、結局価値原因論の相違に求められるといてよい。マルサスは尺度論において若干の変遷を経て、結局は支配労働説を展開しその論証に努めた。結論的に言えば、それは単に労働の価値の不変性を措定したものであって論拠づけたものとはなっていない。しかし彼においては、これは、労働という犠牲で測った、財によって得られる富及び満足（経済的福祉）の測定を意味するものであった。

こうした原因論、決定論、尺度論の相違が、リカードゥとマルサスの利潤論、従って分配論、経済学体系の相違に導いているのである。両者の諸学説を検討すれば、両者の間の経済観更には人間観、方法論や人生観の相違を指摘することができる。

J. S. ミルはリカードゥを批判的に継承し、他財一般との交換比率としての一般的相対価値を問題とし、他財全体の側の事情を一定として当該財の価値の水準及びその変化を問題とした。価値要件としては効用と獲得の困難とをあげ、後者に関して三種に分け、それぞれの価値決定法則を論じた。このうち任意不可増財、独占財の価格、そして任意可増財の市場価格は需給説で説明される。

この場合の需給説は需給均衡説とも称されるものである。供給は売りに出される量であり、需要は買いたいと思う量であるが、ミルの特徴は、後者を価格に応じて変化するもの—需要関数—として扱っている点にある（供給についても不明確ながら同様の示唆もみられる）。供給 S が与えられれば、需要 D との関係によって、 $D > S$ ならば価格が上昇し、 D の減少、 S の増加を通じて、結局需給一致の点で価格の騰貴は止む。逆の場合は逆である。価値（価格）を決定するのは需給の一致である。

$$D = f(p) \quad D = S$$

$$\dot{p} = F(D - S) \quad D - S \geq 0 \text{ に応じて } \dot{p} \geq 0$$

これがミルの需給説の基本型である。彼はこれを上記のみならず、賃金、貨幣価値、国際価値にも適用する。

収穫不変及び逓減に従う財については生産費法則に従う。リカードゥの投下労働説はその修正要因の故に否定される。市場価格が自然価格に接近していく過程は時間の経過のうちに考えられ、市場価格の変化は費用価値に接近する道であり、自然価格が費用価値に等しいとする論拠は、供給量の変化とともに考えられる。供給量は通常の利潤を含んだ生産費と価格との関係によって規定される。しかし、彼の論理を追求すれば、需要量を暗黙に導入して、その量を生産するに要する生産費をもって、自然価格が決定されるとしているのである。

結局ミルは、需給法則においては、価値（価格）をパラメトリックに動かして需給均等によって市場価格を説明する。市場価格の自然価格への接近過程は供給量を、自然価格決定における生産費法則においても同じく供給をパラメトリックに動かしたものとなっているといつてよい。需給説をもって価値論を統一しようとしたその意図は、マーシャルによって開花する。

これら著名な学者に加えて、古典派には、この他に、素朴な需給比率説の説明を展開したローダーゲール、リカードゥの変形の価値論とともに資本価値説ともいいうるものを展開したトレンス、効用と供給制限を対置・統合して古典派の諸価値学説を総合化しようとし、また限界効用説の先駆者としての貢献もみられるシーニョア等の貢献があり、学史上決しては無視しえぬものが多々あった。

こうした古典派の諸学説を摂取し総合化したのがマーシャルである。マーシャルにとって、富は人間の欲望の対象であるとともに、人間の努力の結果である。富をめぐる人間活動のこの二面性の認識こそが、彼の経済学の基本的性格を形づくるものである。この欲望・努力を経済活動に作用する動機（誘因・抵抗）として取扱い、その動機の強さを効用・非効用として表わす。努力・犠牲の真実生産費＝非効用が供給を規制し、欲望満足＝効用が需要を規定するが、これら主観的なものを貨幣的測度によって需要・供給として関数関係において把え、対置する。そして両者の均衡する点において価格が決定される、とみる。

彼はこの兩者について、様々な新しい分析用具を用いて分析を進めた。特に生産活動に伴う時間要素の導入を図り、即時的には効用が、時間が長くなるほど生産費が大きな影響を与えるとした。この点で彼の説は、古典派とジェヴォンズ等の限界効用説との折衷あるいは二元論であるとされることもあるが、それは間違っている。価格の水準を決定するのはあくまで（真実）生産費と効用—供給と需要—であり、その変化に大きく影響を与えるものが、時間を異にするにつれて異なるということであるからである。この点で、当時としては革命的であったジェヴォンズの限界効用説は理論的にも包摂された。

ジェヴォンズはその価値決定論においては、財所有量を一定とした交換理論にとどまっているが、生産論では労働に伴う苦痛という積極的な犠牲を基礎にしている。この点、彼やマーシャルと、メンガーやワルラスの機会費用概念との間に見られる労働観、生産費概念、そしてひいては経済学体系の相違に注目すべきである。マーシャルは経済活動を、欲望の満足と努力・犠牲との差、即ち経済的福祉の増加とみる。それは限られた手段の多用途への配分に止まらず、この手段を努力・犠牲によって増加する点にまで拡大されている（ここに「代用原理」が作用する）。この点で、ワルラスにおいては価格は単にパラメトリックな機能を果たすにすぎないが、マーシャルにあっては、価格はある意味での効用・非効用の測度であり、社会的な福祉の増進を測るものともなっている。価格がこのような意味をもつとすれば、均衡点だけでなく、均衡をはずれた点における価格も意味をもつことになる。均衡の安定条件の相違も単に形式性だけでなく、大きな意味合いの違いを含むことになる。単に微視的・静態的のみではなく、巨視的・動態的な性格をもち、また政策的性格を主とする経済学が、彼を師とするピグーやケインズ等によってその線上で築かれていく理由の根源は、こうしたマーシャルにもとづくのである。

以上は、先生の研究業績のうち価値決定論史について、ごく概略的に、しかも私の乏しい理解力をもって、解説・説明したにすぎない。先生のご業績は広範・多岐にわたり、この他にも価値尺度論史、スミス資本蓄積論や資本の自然的投下順位論、リカードの分配論や経済学体系、マーシャル経済学体系の分析等において、とりわけ独創的な足跡を残しておられる。しかし紙幅の関係で、残念ながら、それらに触れることは断念せねばならない。

先生の諸研究はいずれも常に学界の注目をよび、高い評価を受けてきた。しかし先生はあえてこれらを学位論文としてまとめ提出されることはなかった。上記で一部触れただけでも、その研究成果は経済学博士の学位を受けるに十分値いするものであり、学位申請を早くからしばしば慫慂もされてきた。にもか

かわらず、とうとうそれが実現しなかったのは、弟子たち、とりわけ私のいた
らなさによるものであることを深くお詫びせねばならない。だがあえて付け加
えて、先生はある「信念」からこれを堅く固辞されつづけたということも、最
後に記しておきたい。

V

昭和60年2月発行、即ち先生にとって最後の執筆となられた「神漕」第25号
に、先生は山登りの趣味を共にされ、前年癌のため急逝された田中修教授につ
いて、悲しみの一文を寄せられた。先生ご自身もすでに同じ病いにおかれ、
余命いくばくもない、ということをご存知なかった。そして私たちにも思いも
及ばないことであった。先生について、そのすべてを過去形で語らねばならぬ
ことほど、悲しくまた残念なことではない。

先生のお人柄を知る人は、先生を「無欲活潑」、「他者に対して非常に気配
り・心づかいをする」、「人情味豊か」な人であったと言われる。それと同時に
「気性が激しく、直情径行」の人であった、とも言われる。私には、助手にな
った頃、お宅へ伺った時に、先生を前にして奥様が言われた言葉が思い出され
る。「弟子というものは、(学風のみならず)人柄までよく似てくるものです
よ。」先生はただニヤッとされただけであるように記憶している。坂本先生を
描かれた文章を読むと、先生は学風のみならず、お人柄そのものも、坂本先生
を殆どそっくり受けつがれた方であったように思われる。御家族、親戚、友人、
同僚、知人、教え子に対して、深い愛情を示された。正義感に強く、不正や誤
りに対しては徹底的に戦い、同時に罪を憎んでも人を憎むことはなかった。世
におもねることなく、名利に無関心であった、等々である。そのためには、確
かに大声で叱りつけたり、気性の激しさも時には表わされた。そのために一見
近づきにくさを感じさせられる面もあった。しかし先生に直接に接し、そのお
人柄にふれると、そうした点は全くの誤解であり、その人情味の深さを感じざ
るを得なかった。ゼミ卒業生が自主的に同窓会「南凌会」を結成し、毎年先生

を囲んで親睦会を催すに至ったのも、それ故である。何かにつけ、卒業生は問題を先生に訴え、助言をいただき、御厚情・御指導をいただいた。

先生といえば、私たちは人を魅了せずにはおかなかったあの（駄）洒落を思いいおす。先生は好んで人づきあいをされ、諸々の会合にはよく出席され、また進んで談笑にも加わられた。しかし一方で、私には、先生はある意味で孤独を求められ、また孤独を好まれた、孤高の人といえるところがあったと思う。

（駄）洒落もそこからきた面があったと思われる。先生は学問は言うに及ばず、いつも何かに熱中されるところがあった。ラジオやカメラ、魚釣りや旅行、そして山歩き——こうした先生の熱中されたご趣味は、考えてみれば、ご自分ひとりで楽しむことのできるものであった。晩年とりわけ好まれた飲酒についても然りである。ある意味では、先生は世俗を生きるには不器用な方であり、ために世俗的な興味や名声から遠ざかられた面もあったように思われる。しかしこのことと先生が常に社会や経済の動向に気を配り、関心を寄せ、洞察力を発揮されていたこととは別である。

先生は昭和35年に、聖パウロの洗礼名でご家族と一緒にカトリック信者として洗礼を受けられた。先生のお人柄は、もちろん敬虔なカトリック信者としての生活態度に裏打ちされたものでもあった。経済学者であるとともにカトリック信者である先生の世界観、人生観、経済観、そして宗教観は、「経済・社会生活の指針」なる論文で展開されている。「カトリック者は窮極的価値の体系を教会から与えられている。自身の弱さの故にそれを守り通せないかも知れないが絶えず反省することによって、あるべき人間の、経済社会の姿を見つめつつ自ら努力」しなければならない。「教会はまさにカトリックであって全人類の立場に立つものであり、その与える道徳的秩序は、神の似姿に造られた人間ペルソナになるための、即ち人格を完成するための道を示したものである。…〔キリストの〕神秘体への全き合一こそ人格完成の極地、人間の生きる目標でなければならない。」

これらの言葉を読む時、カトリック信者でもなくまた何の宗教にも特に関心

を寄せてこなかった私にも、とりわけ入院・闘病生活を送られていた間の先生のお姿、生活ぶりがあらためて目に浮ぶ。自らの病いにご自身おそらく気づかれていながらも、それを決して口には出さず、必死に病と闘い、看護する奥様そしてご家族、そして私たちまわりの者に深い愛情と気配りをされながら、カトリック信者としての生活態度を無言のうちに示され、やがてイエス・キリストを通して、神に近づかれていった先生。意識がなくなられているはずなのに、神父が祈りをささげられはじめると、身をおこし手を合わせて一緒に祈りをささげられた先生。それはカトリック信者としての生き方を示されたものではあったが、同時に無言のうちに、人間として、男としての生き方を私たちに示して下さったように思える。

先生の思い出は、走馬燈のようにめぐり、尽きることはないが、にもかかわらず思うようには文章に綴ることはできない。自分ながらとてももどかしい。しかも以上の先生のご業績やお人柄については、その一端に触れえたにすぎず、また私の独断や勝手な解釈、理解不足による誤りも少なからず含まれていることだろう。この拙文に、天上の先生は苦笑されていることだろうと思われるが、ただただご寛恕をお願いするばかりである。

南方先生のご冥福を心よりお祈り申しあげ、筆を置かせていただく。

